

IDR4M洪水ハザードについて ～水害リスクラインと浸水想定区域図の統合表示～

令和7年5月13日

豊橋河川事務所

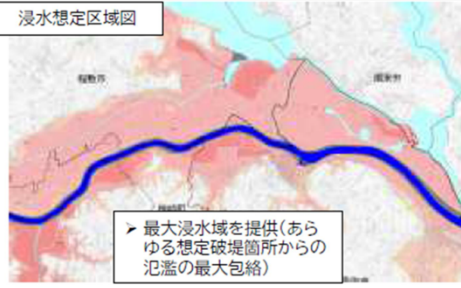
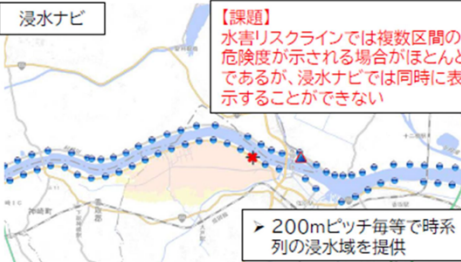
IDR4Mの開発背景と概要

背景

- 自治体が、現在の河川情報から洪水時に浸水する危険性が高い区域を推定することは非常に困難なため、**避難指示等の発令において、自治体全域を対象とすることが多い現状**があります。
- 避難指示等の発令対象範囲が広いことで、切迫性を伝えにくく、**逃げ遅れ**発生につながりやすいこと、必要以上の避難所開設により**人的資源を割くことになる等の課題**がありました。

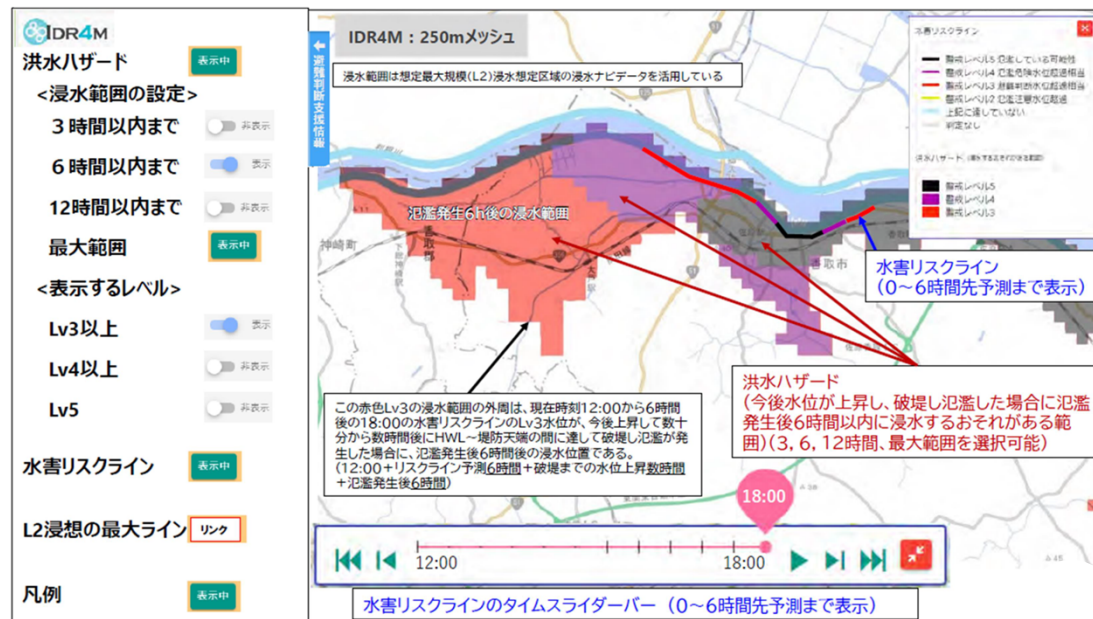
IDR4Mの概要

- 自治体による避難指示の発令等の支援を目的に、IDR4M(市町村災害対応統合システム)が開発されました。
- IDR4M洪水ハザードでは、水害リスクラインの予測に基づき、浸水ナビの破堤点毎の時間拡大想定氾濫エリアを適宜マップに表示することで、**的確なタイミングで地域を絞った避難情報の発令を支援**することが可能です。

	洪水発生切迫度が高まった河川区間	浸水リスクのある区域等
絞り込まれていない情報	洪水予報等の情報  左右岸の区別がない 受け持ち区間ごとの情報(数km～十数km)	浸水想定区域図  最大浸水域を提供(あらゆる想定破堤箇所からの氾濫の最大包絡)
絞り込まれた情報	水害リスクライン  左右岸それぞれで判定 200mピッチ毎で危険度レベルを判定	浸水ナビ  【課題】水害リスクラインでは複数区間の危険度が示される場合がほとんどであるが、浸水ナビでは同時に表示することができない 200mピッチ毎で時系列の浸水域を提供

現在提供されている情報

(洪水予報等の情報、洪水浸水想定区域図、水害リスクライン、浸水ナビ)



IDR4M洪水ハザード表示例

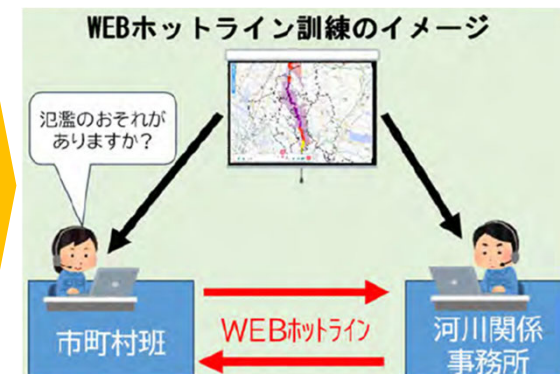
IDR4M洪水ハザードの活用例と今後のスケジュール(案)

IDR4M洪水ハザードの活用例

- これまででは自治体と河川管理者が複数画面などで同時に様々な資料を表示しており、地図や縮尺の違いにより、情報を即時に把握・共有することが困難でした。
- IDR4M洪水ハザードの活用により、**今後一つの画面上に情報を集約かつ重ねて表示**できるため、意見交換をスムーズに行うことが期待できます。



災対室のイメージ



今後のスケジュール(案)

- 今後、全国版(β版)の試験運用やモニタリング、アンケートが予定されています。
- 次回協議会等で、最新情報を共有予定です。

項目	～R6	R7												R8～
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
利活用検討会	→ 5市町村実施		↔ アンケート実施											
R6及びR7モニタリング 自治体への説明会(デモ版)		●	事務連絡(デモ版のご説明およびヒアリングのご連絡) 基本的にweb会議形式でデモ版などについてご説明⇒ヒアリング&アンケート											
109水系全国版(β版)の試験運用(出水期)														
全国版(β版)に関する自治体ヒアリング& アンケート						●								
大規模氾濫減災協議会による全国自治体 への情報提供														
全国版の本運用														

R8年度より運用開始